

小さな腰を掴んで自分のほうへと引き寄せながら、
下から己の欲望で突き上げる。

「んんっ……ひ、はあっ……うう……あ……あ
ああっ！」

指の何倍も太くて硬い漲りで開花したばかりの蕾を
押し広げられ、ディーノは苦しげな声を上げながら
背を仰げ反らせた。

上下に揺さ振られ視線が定まらなくなるが、少し
でもその顔を見ていたいと瞳がロマーリオを捕らえる。

「く……うう……んっ……はあ……」

いつもは余裕のある顔ばかり見せているロマーリオ
が、今は頬を上気させ、何かに耐えるように目を閉じ、
歯を食い縛りながら切なげな息を漏らしている。

異物感ほ更に増し、剛直が後孔を出入りする痛みに
生理的な涙が浮かんでくるが、ロマーリオが感じて
くれていると思うと不思議とその異物感や痛みも
嬉しく感じられた。

少しでも長くロマーリオの顔を見ていたかったが、
徐々に激しくなっていく動きに頭の中が朦朧として
きて、凭れ掛かるようにロマーリオの胸にぽふと
顔を埋めた。

「ふあっ……や……ひゃうっ」

凭れ掛かったことで互いの腹と腹が密着し、間に
挟まれたペニスが擦り上げられる。

(こうしてると……気持ちいい……)

毛深い腹にペニスを擦り付けるように自分から腰を
動かすと、手で扱かれた時よりも強い快感が背筋を
駆け抜けた。

ペニスが擦られる快感が強ければ強いほど、異物感
や痛みが薄まっていく。

痛みを忘れるために、より強い快感を得るために、
ディーノは夢中になって先走り再びトロトロと
滴らせ始めた。ペニスをロマーリオの腹に擦り付けた。

「ふう……ん、ん……くっ……うう、うう、あっ……」

快感を求めて動くディーノの腰の動きがちょうど
抽送の手助けとなって、より大きな快感をロマー
リオにもたたらす。

ただでさえ長い時間焦らされ、艶かしく蠢く内袋に
ペニスを搾り上げられ、どうにかなりそうなのを
必死に堪えていたところにディーノの腰の動きが
加わり、気を抜くとすぐにでも持っていかれそう
だった。